

# 家庭科における『探究』の姿を引き出す指導について

## ～課題を見出し、既習学習を活用するための単元構成の工夫～

坂本 和子

家庭科において子どもたちが『探究』する姿を引き出すためには、子どもたち一人一人の生活に沿った課題に対し、自発的に家庭科における見方・考え方を働かせられることが必要であると考えた。課題を子どもたちの生活に沿わせ自分事にするためには、子どもたちが現在の生活から課題を発見し、自分自身の価値観に照らし合わせ課題解決をすることが必要である。そこで、主体の姿を引き出すために子どもにとって身近であり一人一人が用意している防災袋を題材として設定した。また、避難所での生活場面を焦点化し、体験・実験、考察する授業を第1次に設定し、第2次では既習の知識・技能を活用して防災袋の中身について子どもたち自身が問題を発見、課題を設定・解決する単元構成をしかけとした。

実践をとおして、防災袋を題材として取り扱い一人一人が内容の見直しを行うしかけから、子どもの主体の姿を生み出すことができた。また、体験・実験、考察する活動を設定する単元構成のしかけから、子どもが生活の営みに係る見方・考え方を働かせ防災袋の課題を発見し、既習の知識・技能を活用し課題を解決する姿につながった。

キーワード：課題設定、単元構成の工夫、生活の営みに係る見方・考え方、防災袋、避難所での生活

### 1. 1. 研究内容・方法

家庭科は、生活の自立や、よりよい家庭生活に向けて、実践的・体験的な活動をとおし、家庭生活の事象を捉える見方・考え方を身につけ実践する力を育む教科である。家庭科の見方・考え方とは、生活の営みに係る見方・考え方と示されている。具体的には、家族や家庭、衣食住、消費や環境などに係る生活事象を、「協力・協働」「健康・快適・安全」「生活文化の継承・創造」「持続可能な社会の構築」の4つの視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫することとされる<sup>(1)</sup>。それらを自分・家族・社会に向け、今までの生活を振り返り、現在、未来に生かせるようになっていくことや、自分のあり方を考えることも重要である。そのために、生活の営みに係る見方・考え方を働かせた衣食住に関する実践的・体験的な活動をとおして、主体的な学びを創る必要がある。

家庭科における『探究』の姿とは、子どもたちが生活の営みに係る見方や考え方を働かせ、過去や現在の自分の生活から見出した問題を、よりよい生活をめざして課題設定し、解決する方法を検討・計画し実践・評価改善するサイクルを繰り返すことと定義する(図1)。そうすることで、子どもたちのこれからの生活や生涯を見通した生活を変容させる力を育む指導をめざす。

子どもたちの様子を観察すると、子どもたちは自分の生活にあまり解決すべき問題点(疑問・困難さ)を感じていないことが多い。それは、子どもが生まれ育った自分の家庭生活が基本であり、それ以外の家庭生活の実情を知る機会が少ないためである。毎日の生活が当たり前で、「より良い生活」と実生活を比較したことがないため、問題点にも気づきにくい。

本実践で取り扱う防災袋は入学時に、学校からの要請で保護者が準備している。長期休みには持ち帰っているが、教師の目からは問題を感じられるものでも、子どもは「これでいい。」と考え学校に持って来ている。その中から、教師主体で課題を提示するのではなく、子どもたちが自ら問題を見出し、課題を設定し防災袋の中身について改善するためのしかけを工夫することで、子どもたちが主体的に既習学習を活用する姿を引き出すことができるのではないかと考えた。

本実践の主張点を「防災袋を用い、体験・実験、考察する活動を設定することで、既習の知識・技能を活用し、主体的に生活の中から課題を見出して解決する力を高めることができるであろう。」と設定し取り組んだ。

具体的には、①実生活に沿った子ども主体の課題解決の行える題材(防災袋の見直し)設定、②避難所での生活場面を焦点化し、体験・実験、考察する活動をとおして得た見方・考え方を活用し、防災袋の課題発

見・解決する単元構成をしかけとした。

これらのしかけを用いた授業を行い、授業記録、子どもの表現物（ワークシートへの記述）、行動観察から子どもの『探究』する姿を見取り、題材設定や単元計画の効果を検証する。

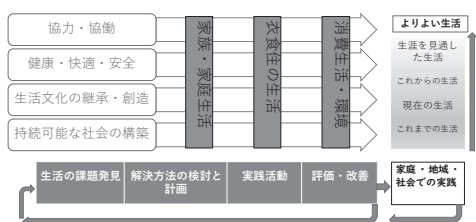


図1：家庭科における『探究』の姿

## 2. 授業の実際

### 2. 1. 単元について

- ・単元名「日頃の備え，自分にできる事を」
- ・対象児童 6年生
- ・単元計画（全6時間）

- 第1次 第1時：災害時の生活を考える。  
 第2時：災害時の食生活について考える。  
 第3時：暑さ，寒さへの対応について考える。
- 第2次 第4時：学校の備蓄品や備えについて考える。  
 第5時：防災袋の見直しをする。  
 第6時：自分にできる事を考える。

### 2. 2. 子どもの実態から

単元学習に入る前に，本校6年生の子どもたちの災害への意識についてアンケートを実施した（図2）。

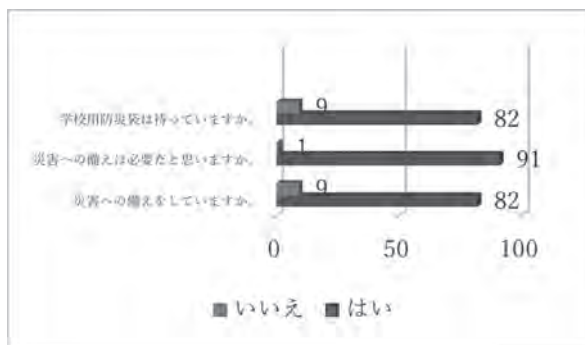


図2：子どもの実態アンケート

本校の子どもたちの「災害への備えは必要だ」と考える意識は高く，防災袋についても必要性は感じているようだった。小さい頃からの防災教育の取り組みや，防災袋を常に教室など身近に置いている環境から意識が高まっているであろうと考えられる。

災害への備えの意識は高いが，子どもたちが自分の用意している防災袋に問題を見い出していない理由を，発言やアンケートの結果と自由記述の中の回答とを照らし合わせた。備えの必要性を否定的に捉えている子

どもの、「あんまりすごい災害を体験したことがないから（何をしたらいいか想像がつかない）」という意見や，肯定的に捉えている子どもの「必要な備えや，その時々はどうしたらいいか知りたい。」、「災害に向けて，何をしておいたらいいか知りたい。」といった意見があった。また，「学校用防災袋の準備は誰がしましたか。」の設問に対し，「自分でした」…18人，「家の人がした」…8人，「家の人と一緒にした」…52人という回答があった。これらの事から，災害についての知識・認識の不足，災害時の生活について知らないことや，実際に自分で防災袋を使う場面を想定できていないことが原因であることがわかった。

そこで，災害時の生活について知ること，考えることを軸にした学習を単元構成の第1次に設定することで，第2次の問題発見，課題設定・解決の場面で，家庭科における生活を充実させる見方・考え方を活かした『探究』する姿が見られるのではないかと考えた。取り組んだ実践を以下に記す。

### 2. 3. 第1～4時の子どもの姿から

第1時：災害時，日常生活で出来なくなることを考えよう。

第1時では，最近日本で起こった災害の様子を写真や動画で示した。南海トラフで想定される被害予測では，普段自分たちが暮らしている生活範囲の和歌山市も浸水予測がされていることを知った。自分の家が浸水予測範囲に入っていないか調べたり，市外から通学している子どもは自分の市町村の情報を検索したりしていた。「地震が起きたら，家に帰れればいい。」と発言していた子どもも，交通インフラが停止した中では，小学校などの避難所で待機することが身の安全を守ることだと理解した。

子どもたちが避難所での生活の必要性を理解したところで，実際の避難所の写真を示した。附属小学校が初期の臨時避難所として指定されていることを紹介し，「自分がその場にいる」として，「ライフラインの停止した中，避難所となった小学校で過ごす」場面を想定し，日常生活で出来なくなることや困りそうなことを考えグループで共有した（図3）。



図3：第1時ワークシート

具体的な場面を設定することで、今まで考えなかったことを想像できた子どもが多かった。「床が冷たそう。下に毛布を敷いているよ。」「隣の人から丸見えなのは、ストレスになりそう。私には無理かな。」「学校に毛布がこんなにあるのかな。」など、写真を見た感想を話し合っていた。子どもたちは水・電気・ガスなどのライフラインが停止し、出来なくなることを挙げていく中で、思っていた以上に生活が制限されることに気づき、今の便利な生活のほとんどが電気に頼っていることを知った。備えや防災知識の大切さを感じた子どもや、想定以上の不便な生活に、自分の防災袋の問題、課題に気づき見直す必要性を振り返りの中で記述する子どももいた。

第2時：「災害時の食生活」の課題を考えよう。

第2時、第3時では生活場面の課題点をさらに焦点化し考える活動を行った。

災害時の生活の中で、子どもたちの一番関心のあることが「避難所での食事」についてだった。そこで、第2時は「災害時の食生活」を学習課題とした。

初めに、子どもたちの防災袋の備えの中に多かった乾パンを試食し、その良さや課題を話し合ったところ、以下のような意見が出された。

良い所

- ・美味しい。
- ・賞味期限が長い。
- ・調理せずに、すぐに食べられる。

課題

- ・食事としては満足感がない。
- ・温かい物を食べたい。
- ・お年寄りや赤ちゃん、アレルギーのある人などは食べづらい。

子どもたちは、「避難所での食事」と仮定し、実際に食べてみることで、避難所での食事には満足感や、様々な人への配慮が必要であることに気付いた。

その後、東日本大震災の避難所の炊き出しで出された食事のメニュー写真(図4)を見せ、良さや課題、考えたことを話し合った。

初め、食事の写真を見て、「どうして箸を半分にして配るんだろう。」「白米を配らないのは何故」と感想を話していた子どもも、グループで話し合う中で、思っていた以上に物資が不足することや、限られた条件の中で工夫して食事を提供していた人々の努力を知ることができた。また、子どもたちは(表1)の課題を見つけたことで、災害時に必要な食事の備えの観点に気付くことができた。



図4：第2時において提示した避難所での炊き出し例<sup>(2)</sup>

表1：第2時において子どもが見つけた課題

- ・食事を作るための火や、水も不足する。
- ・冷たい物よりも温かい物の方が、満足感や安心感がある。
- ・食べ物だけでなく、食器類や箸も不足する。
- ・三色栄養バランスの緑や赤が不足している。
- ・献立のバランスに課題がある。
- ・お年寄り、赤ちゃん、アレルギーなど様々な人たちへの配慮が必要である。
- ・多くの人にいきわたらせるため、一人当たりの配られる量が少ない。

第3時：避難所での暑さ、寒さについて考えよう。

第3時では、東日本大震災で避難所生活を送った人たちの困りごとのアンケート結果を紹介した。子どもたちは、第1時で考えたように、避難所には食事以外にも課題があることを知った。そこで、「避難所での暑さ、寒さへの対応」を学習課題とし、体験・実験活動を行った。

災害時の生活は、エネルギーの使用の限られた条件下で、暑さや寒さへの対応が求められる。「夏を涼しく快適に」の学習で、風を通すことで涼しく過ごせることを学んでいる子どもたちは、風を通さない=空気を保つことで暖かく過ごせることに気付いた。そこで、お湯を入れた瓶を人に見立て、布を巻いたものと、新聞紙と布を巻いたものを20分間冷蔵庫に入れ、水温変化の比較実験を行った。1枚の新聞紙を中にはさむだけで、水温低下に大きな違いが現れた(図5)。実験結果を受け、空気の層を作ることで、温度を保つことができることを説明した。



図5：第3時 水温低下を比較する実験

その後、子どもたちは身近にあるもので工夫をして空気の層を保つことができず試し始めた。新聞紙やポリ袋、避難所でよく使用されるアルミシートを身に纏ったり、腕を筒の中に入れてたりして、体感温度の違いを比べていた。直接床に寝転んだ後に、段ボールや新聞紙の上に寝転がり、空気の層が多いほど地面からの冷気を防ぐことができると気付いた子どももいた。また、その空気の層の柔らかさが、床に座ったり寝たりする時の快適さにつながることも体感した(図6)。

災害時でも身近にある物を利用し、空気を通したり保ったり工夫することの大切や、暑さや寒さへの備えの必要性について振り返りに記述する子どもが多かった。





図6：暖かさを実際に試している姿

第4時：学校の備蓄品や備えについて考えよう。

第4時では子どもたちは今までの学習の中で見つけた課題から、災害時の備えに必要な物を考えた。子どもたちはそれぞれ、食べ物や生活備品、充電器など生活に必要であるものを話し合った(図7)。その後、実際に学校の備蓄庫を調べ、災害時に活用できる資源の確認と見直しを行った(図8)。子どもたちの予想よりも多くの物資があったが、使い方の分からない物や、必要だと考えた物がなかったり、全校生徒数に対し数が不足する物があったりした。

道具の使い方を調べて試したり、故障している物や不足している物は日頃から調べて見直したりする必要性を感じた子どもや、自分で備えることの必要性に気付く子どももいた。

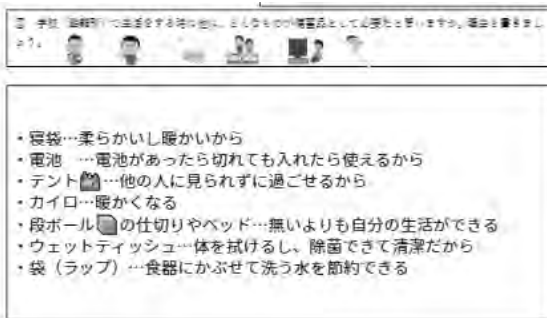


図7：子どもの考えた避難所に必要な備蓄



図8：校内の備蓄品調べの様子

### 3. 授業の考察

本実践では、前時までに発見した課題について、主体的に取り組み、生活をよりよくする見方・考え方を活用する子どもたちの姿から考察するため、第5時から記述する。

第5時：自分の防災袋の中身を見直し、災害時の生活に向けてよりよい備えについて考えよう。

本時で、主体や活用の様子が見られた場面はいくつかあった。

まず主体に関して考察する。子どもたちは、これまでの単元学習の中で災害時の生活の問題点や課題を見つけている。第5時では、「避難所での生活の問題・課題がわかる」見方・考え方や、「どうしたら課題を解決できるかわかる」知識・技能を、自分の防災袋に向けた。今まで問題と捉えられていなかった防災袋から問題を見出し、課題を設定し解決方法を考える活動である。

ここで子どもたちが考える「よりよい備え」とは、「自分」の生活をよりよくする備えであることを確認した。日常的にメガネや服薬が必要な子ども、食べ物の好みや服の大きさなど、子ども一人一人にとって、生活に何を必要とするかは様々である。今の自分にとって必要な備えについて考えるように発問をした。そして、自分の防災袋の内容を調べて書き出し、感じた問題をメモすることを指示した。一度に課題解決まで指示しなかったのは、途中の段階で課題発見の着眼点を共有することで、課題を見つけづらい子どもへの支援や、課題解決の新たな視点をもつことができると考えたためである。

活動が始まると、子どもたちは自分の防災袋の中身を写真に取り、手を止めることなく意欲的に調べていた。調べる中で感じた防災袋に不足している物やおかしく感じたところを、問題としてメモするだけでなくそれを自分から解決すべき課題であると設定し、新しく入れる物や見直す物を考えたり、友だちと話し調節したりしながら、ワークシートに書き込み課題解決していった(図9)。

- C：食べ物だけじゃだめだ。おれの(防災袋の中身は)すごい少ない。  
 C：見て見て。1年生の時の服が入ってる。もう着られないのに。  
 T：どうしたらいいかな。  
 C：今からの季節やと、暖かい服を入れた方がいいな。  
 C：食べ物が乾パンだけ。  
 C：おいしかったけど、絶対足りないな。  
 C：栄養バランスが大事。何を入れようかな。調べてみよう。



図9：第5時 防災袋の中身を調べ記録する様子

これは、学校提案のめざす主体の姿の第1段階「興味関心をもって課題に取り組む」に加え、第1.5段階「課題遂行に伴う自由選択や課題遂行自体に喜びや満足を見出しながら取り組む」、第2段階「自身を方向づけたり、調整したりして課題に取り組む」段階であると考えられる。自分で課題を解決する方法を選択・調整できると感じている自己効力感から、自分で取り組むことができたと考えられる。活動に取り組むことが困難な子どもも、グループの友達とのやりとりや、教師の声かけで活動することができていた。振り返りの中で、ほとんどの子どもが「防災袋の中身を見直し、災害時のよりよい備えについて考えることができた。」アンケートに◎（よくできた）や○（できた）で答えている。

次に、子どもたちが生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、既習学習の知識・技能を活用できていたかに関しては、授業中の発言や、課題解決したワークシートから考察する（図11, 12）。

本単元における学びの活用は、避難所での生活場面を考え衣食住の生活に関する見直しを行えているか、具体的な備えとその理由を考えられているかで検証する。

以下は授業中での子どもの発言である。下線は生活を充実させる見方・考え方の活用、下線は本単元で子どもが見つけた課題であることから、本単元学習の活用に関する発言である。

（「衣」に係る備え）  
 C：これから寒くなるから、暖かい服が必要だ。  
 C：今はマスクも絶対いるね。

（「食」に係る備え）  
 C：おはしも不足するから、1膳でなく5膳にしよう。  
 C：黄色の栄養に偏らないようにしよう。  
 T：何を入れるといい？  
 C：これ、緑の栄養で美味しいよ。おすすめ。

（「住」に係る備え）  
 C：アルミシートはどう。  
 T：何のために入れようと思うの？  
 C：羽織っても、下に敷いてもいいよね。

子どもたちは家庭科における生活を充実させる見方・考え方を働かせ、自分の防災袋の問題を次々に発見していた。避難所における暖かい服の必要性、新聞紙の活用、空気の層を利用し暖かさを保つ考えは第3時の学びである。また、三色の栄養バランスを意識して取り入れる事は本単元以前の学びであるが、避難所での生活では黄色の栄養に偏りがちであることや食器

類の不足、避難所での調理環境の設定の難しさは第2時での学びの活用である。この様に、子どもたちは既習の学習で身につけた生活を充実させる見方・考え方で、単元学習で身につけた避難所での生活を充実させる考え方それぞれを活用し、課題を解決していた。

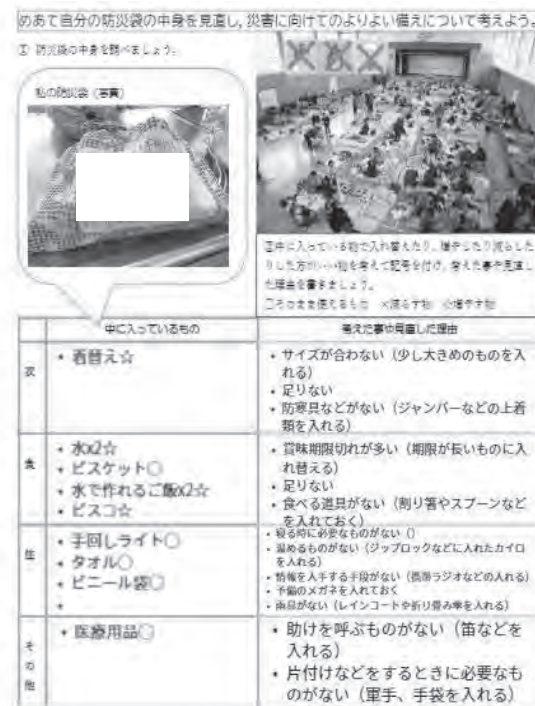


図10：第5時ワークシート 防災袋の見直し

図10の様子に防災袋の見直しの理由を具体的に考え、新しく必要だと考えたよりよい備えをワークシートに記入している子どもが多かった。

自分で課題を見つけるとともに、活動中での他の子どもの課題発見や見直しの発言を受けてさらに内容を見直している姿も見られた（図11）。

見直し活動後、自分の防災袋の見直し内容を発表し全体での共有を行った。新聞紙やポリ袋など身の回りにあるものの活用、寒さ・暑さへの対応、衣服はサイズや季節感を考慮すること、食事は量、栄養バランス、種類、味、調理のしやすさを選択の基準にすることなどが意見として出された。他にも「本」「紙と鉛筆」「予備のメガネ」など、自分にとって必要な備えについて話す子どももいた。これは、実際に自分が避難所で生活し防災袋を使うことを具体的に想定できたからであると考えられる。一人一人の見直しの内容を統合し分類することで、子どもたちは災害への備えの見直しの視点を明確にすることができた。



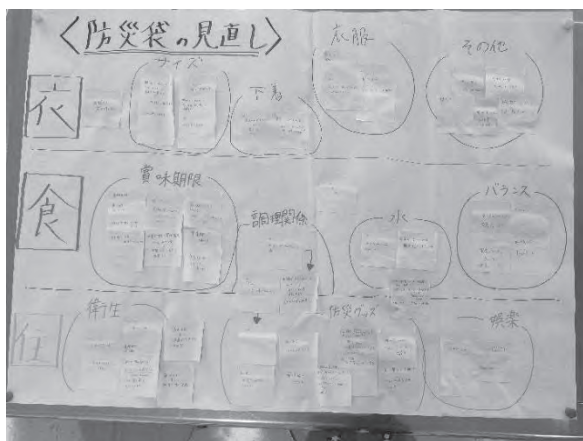


図 11：協議会での子どもの課題発見と他の子どもへの影響のみとり

#### 第 6 時：単元のまとめ

これまでの学習で、子どもたちは生活の営みに係る見方や考え方を働かせ、過去や現在の自分の生活から見出した問題を、よりよい生活をめざし課題設定し、解決する方法を検討・計画した。家庭科の学びにおいて、実際の生活の中で実践・評価改善するサイクルを繰り返すことが大切である。第 6 時ではこれまでの学習を、日常生活につなぐことを意識づけるため、単元の学習後も自分自身で実践できることを考えた。

単元学習の中で気付いた事や防災や災害について、さらに知りたいことを調べることに興味をもった子どもは、その場にあった本やインターネットで調べていた。防災の冊子の中から災害時に役立つ紙食器の作り方を見つけ試す姿も見られた。第 5 時の学習後、防災袋を家に持ち帰り実際に見直した子どもは、実際に見直した感想を友達に話していた。また、家族で備えについて話し合うことや、兄弟に防災袋の見直し方を教えると話す子どももいた。時期毎に備えを見直す必要性を考え「次は中学生になった時に考えよう。」と話す子どももいた。

災害への備えは、日頃の意識や、生活の変化に伴い見直しが必要である。今後も子どもたちが自分に必要なことや自分にできることを、学びを活用し自己調整することで、実践する姿につながることを期待している。

以上のことから、避難所での生活場面を焦点化し、体験・実験、考察する活動をとおり、見方・考え方を活用し防災袋の課題発見・解決する単元構成のしかけは有効であったと考える。

## 4. 成果と課題

本実践を振り返って、主体の姿を引き出す題材設定のしかけ①、活用方法を引き出す単元構成のしかけ②は、子どもたちの『探究』する姿につながったと、学びの姿から捉えることができたことが成果として挙げ

られる。

しかけ①の実生活に沿った題材設定では、子ども一人一人が、主体的に防災袋の見直しに取り組み、課題解決を行うことに繋がった。

しかけ②単元構成は、単元学習が進むに順い、授業の言動や振り返りの中に自分の防災袋の中身について触れる子どもが増え、課題を発見する意識を高めることに繋がった。前時までの学習で、避難所での生活場面について体験させたり考えさせたりすることで、自分の防災袋の問題、課題を発見し、既習の知識・技能を活用して必要な備えについて具体的に考えることができた。また、全体の話し合いの中で、防災袋の見直し内容を交流することで、見直しの観点を深め、ライフステージの変化に伴う今後の防災袋の見直しへの知識・技能の汎用性を高めることができた。

課題として、防災袋を扱った第 4 時の学習内容の精査が挙げられる。1 時間の学習活動としては、防災袋の内容を調べ、問題を書き出し、課題発見、見直しと煩雑であった。子どもたちの発見する情報の多さと、その内容をタブレットで書き込む作業量の多さによって、子ども同士で意見を交流させる時間的な余裕がなかったことが悔やまれる。又、課題を自分事にするしかけによって見つかった課題が個人に限定的で、子ども同士の積極的な課題共有まで至ることができなかったことが挙げられる。単元計画に余裕をもたせ活動を精査することで、より子ども主体の姿を引き出すことができたのではないかと考える。

今後も、生活の中から問題を発見し、課題発見・解決することとおして、主体的によりよい生活を見出し工夫する子どもの育成をめざし研究に取り組んでいきたい。

#### 引用文献

- (1) 文部科学省(2017)「小学校学習指導要領解説家庭編」
- (2) 農林水産省 HP「災害時を想定した食の備え」  
<https://www.maff.go.jp/j/zyukyu/foodstock/gakusyu.html>  
(2022 年 12 月 27 日にアクセス)

#### 参考文献

- ・石垣和恵, 村山良之(2020)「防災の視点を取り入れた家庭科学習の手引き」山形大学
- ・高木幸子(2018)「未来に向かう家庭科 リスクに向き合う授業の創造」開隆堂
- ・高木幸子(2017)「小学校家庭科において防災教育の視点から学ぶ授業内容の検討」, 新潟大学教育学部研究紀要, 第 10 巻第 1 号, 283-290
- ・西岡真弓ほか(2022)「内容を横断的に構想した中学校家庭科における「防災」授業の実践と評価—My 防災ハンドブックづくりを通して—」, 和歌山大学教職大学院紀要学校教育実践研究, No.7, 79-88
- ・文部科学省(2013)『「生きる力」を育む防災教育の展開』